

談話室

“第5回田原・アショフシンポジウム”と それにまつわる迂遠な話

樋浦 明夫*

今夏(2007年)の7月28日(土)、29日(日)の両日に大分県中津市で第5回田原・アショフシンポジウムが島田達生組織委員長(大分大学医学部看護学科教授)の主催で開催された(図1)。それについて、またそれに直接あるいは間接に関わることを思いつくまま歴史的に、さらにいささか散漫かつペダンチックに紹介したい。

再発見と評価

このシンポジウムの目的は田原淳とルートヴィヒ・アショフによる心臓の刺激伝導系発見に関する業績を顕彰するとともに、最近の心臓学の進歩のトピックスについて討議することにある(第4回 Aschoff-Tawara

シンポジウム報告, 須磨幸蔵, 田原通信2号, p.29, 2006.²¹⁾。第1回は、刺激伝導系の研究, 発見で金字塔を築く礎になった場所, すなわち田原が留学した(1903~1906年)ドイツのマールブルク大学の旧病理学研究所で、当時の同大医学部長 H. ケルン教授主催により1999年に行われた。ここで田原が発見したことについて簡略に紹介する。心臓の収縮のメカニズムを解剖学的、生理学的に説明できなかった時代(先行する断片的な研究は既にあったが)に、心臓のリズミカルな運動の基になっている心臓の壁を作っている心筋の一部が刺激(インパルス)を能率的に伝達するために特殊化し(特殊心筋線維という)、心房から心室内面に網の目のように広がっているその全貌を明らかにし、それを刺激伝導系という概念で統一し、意義づけたことにある^{6, 16)}。心臓の一点刺激が刺激伝導系を伝わることで心臓全体の心筋が収縮し、拍動するという解剖学的、生理学的発見は1960年代から今日に至る人工電気刺激装置(心臓ペースメーカー)の開発の基礎となった(田原淳の先見の明, 「刺激伝導」の命名温故知新, 堀 原一, 田原通信2号, p.12, 2006.²¹⁾。田原の羊の心臓を使って解剖するという発想のひらめきは、グレゴール・ヨハン・メンデル(1822~1884年)がエンドウ豆を実験に使わなければ遺伝の法則を発見できなかったということと共通するものがある(メンデルは“全ての実験の価値と有効性はそのために使われた材料が適当であるか、またそれを目的にかなったやり方で使うかどうかにか左右される”と、彼の実験における植物種の選択を重要視した¹⁾。さらに、田原の発見は、メンデルが自然界における不朽の法則を発表(論文「雑種植物の研究 Versuche über Pflanzen-Hybriden」はドイツ語で書かれ、1886年のブルノ自然研究会誌4号に掲載された)してから20世紀初頭に3人の生物学者によって同じ法則が研究、発表(再発見)されるまでその業績が世界的に評価されなかったという点でも少し似ているかもしれない。しかし、メンデルに取りつかれた一人の男を自称する中沢信午氏によると、メンデルの成果はあちこちで紹介さ



図1. 第5回田原・アショフシンポジウムのポスター

* 徳島大学歯学部

れていたが、その時代にさして注目されなかったのだという⁷⁾。メンデルの遺伝法則の発見は20世紀後半のDNA遺伝学発展の背景をなしている。この点でも、田原の発見が現代のペースメーカー発展の基礎となったことと相通じるものがある。第2回のアショフ・田原シンポジウムは東京と福岡で2001年に開催された(組織委員長：須磨幸蔵)。第3回(2003年)はドイツのポッフム大学付属ノルトライン・ヴェストファーレン州立バード・ユーンハウゼンBad Oeynhausen心臓・糖尿病センターで(同センター外科学 南和友教授主催)、第4回(2005年11月)は東京で行われている(組織委員長：須磨幸蔵)。このように大体2年ごとにドイツと日本で交互に開催されている。今回は、前記のように田原が19歳の時に叔父にあたる医師、田原春塘に養子になった地、中津で開催された(田原淳は1873年に大分県東国東郡安岐町で生まれた。養子になって中嶋姓から田原姓に変わった)。特記すべきはこの回から従来のアショフ・田原シンポジウムという名称が田原・アショフシンポジウムと改称された。

マールブルク大学での思い出と日本の大学の憂い

当初、マールブルク大学解剖学・細胞生物学研究所(田原が留学した旧病理学研究所と隣接しているが、全く別な建物)の肉眼解剖学担当のオミュラーAumüller教授がシンポジウムに参加する予定だったが、体調がすぐれず同研究所のザイツSeitz教授が代わりに参加することになった。筆者がマールブルク大学の同研究所の分子神経科学教室(ワイエWeihe教授)に短期間遊学(2003年)するとすぐに、マールブルクから南東約150kmに位置するビュルツブルクWürzburgで日独学術振興協会の年会“Science and Society”があり、ワイエ教授の薦めで参加することになった。その時にザイツと夫人のトラウドゥルTraudl(2004年ドイツ制作の超ヒット映画「ヒトラー最後の12日間」の原作の一つである「私はヒトラーの秘書だった」の秘書で原作者の名もトラウドゥル・ユンゲ。日本人には性別が分からないほど馴染みの薄い名前のように思われる。この映画の最後に老いた彼女は(2002年に死去)ナレーションで、彼女と同じ年に生まれ(1921年)、彼女がヒトラーの秘書になった時に(1943年)“白バラ”という反ナチ抵抗運動のピラをまいた理由で兄(ハンス・ショル)とともに処刑されたミュンヘン大学の学生、ゾフィー・ショルの存在を知り、“若かったというのは言い訳にならない[ナ

チによる600万人ものユダヤ人に対するホロコーストを戦後のニュルンベルク裁判で初めて知ったことを指している]。目を見開いていれば気づいたのだ”と語っている)が一泊二日で同行してくれた。夫妻が交代でアウトバーンを時速120～30kmで普通に走行(それでも追い越す車が多かった)するのに一驚したのも今は遠い思い出になりつつある。ビュルツブルク市のマリエンベルク要塞Festung Marienberg(マインフランケン博物館)での学術講演の聴講(ドイツ語はチンブンカンブンだった。ただその時の小生のメモにはポッフムのルール大学の哲学教授シュタイクレーダーSteigleder氏のヒト胚性幹細胞(ES細胞)の倫理的問題についての話は面白かったとある。発生初期(胞胚期)の幹細胞はヒトとしての尊厳がないので、その使用は許されるという内容だった。しかし、尊厳の問題だけでなく、実験目的によっては倫理上の問題が生じる可能性があると思われる。)もさることながらビュルガーシュピタルBurgerspitalでのフランケンワインの味わいも忘れられない思い出の一つとなっている。マールブルク大の細胞生物学・解剖学研究所のザイツの研究室は、研究所前の道路(ロベルト・コッホ通り)から階段を5～6段登って玄関に入ったフロア(ここは日本風にいうと外観が2階)からすぐにまた階段を降りたフロアにあった(外観は1階)。こじんまりとした清楚な研究室の印象を受けたが、それでも当時で教官4人、テクニシャン2人、院生4人の構成で自分が出張しても他の人が仕事を継続してやってくれるから安心なのだと言っていた。夫人は別な研究室のテクニシャン(研究の補助をする技術職員)をやっている。筆者が在籍したワイエ研究室(外観3階の全フロアは彼の研究室で4階の屋根裏のようなフロアの半分は教授と彼の秘書以外の研究者の居室とカンファランスルーム)と同じ4階だったのでたまに一室を覗くといつもミクロトームで切片を作成していた記憶がある(週に3日位の勤めだが、フルタイムの7割が支給されると言っていた)。研究所のほとんどのテクニシャンはMTA(医学系技術者という意味か)で、医学的な研究に必要な技術を専門学校で3年半学んで採用されるという。日本の大学では多くの場合研究室に所属してから必要な技術を経験的に身につけるのとは大きな違いだ。筆者の所属した研究室では培養だけをやる人、組織切片を作成するだけの人、分子レベルの仕事だけの人、動物実験だけの人などそれぞれのテクニシャンが自分の専門的なことだけを任されていた(当時、ワイエの研究室は多額の外部資金を獲得していたので、

たくさんのテクニシャンを雇うことができた。秘書を含めて14人もいて、一流の生命科学研究をサポートしている。各部門それぞれ複数のテクニシャンが担当しているので、どちらかが休んでも仕事に穴が開くことはない。最近見かけないなと思っていて夏休みでもないのに2〜3週間休暇を取って、サンクトペテルブルグ、スウェーデン、イギリス、フランスなどを旅行してきたなどという話をよく耳にした。普通の日本人が短い夏休みや、正月休みや年休を取ってそそくさと海外にでかけるのとはちょっと感覚が違うようだ。これが心のゆとりを生む、ほんとの豊かさではないのか…。しかし、ドイツの大学もいいことばかりではないようだ。ドイツの大学は州立で、ヘッセン州にはマールブルク大の外に、フランクフルト大、ギーゼン大の3つが100km以内にある。州政府が3つの大学を維持すること自体に驚きだが、資金的には大変なようで州政府だけからの資金では研究を維持するのが難しい状態で、日本と同じようにマールブルク大とギーゼン大の統合の話があるという。そのせいかどうか定かではないが、研究室(所)では一日中ほとんど電気を付けず、いつも薄暗い中で仕事をしている。最初は暗くて変な感じがしたが、慣れたら気にせず仕事をできるようになった。考えてみると、朝から晩まで煌煌と電気の付いている日本の研究室は資源の無駄使いをしているのかもしれない。ある日、ワイエ教授が今、大学は受難の時代だと言っていたが、人ごとではないという意味で痛く耳に残っている。その頃、日本の大学は小泉流ベテナ師的な口舌で導入された国立大学の独立行政法人化(筆者がマールブルクに滞在していた2003年7月に、多くの大学人や知識人の反対であわや廃案かというところまで追い詰められたが、国会の会期が延長されたため僅差で国立大学法人法は成立した)によってドイツよりもっと悪くなり、より深刻になっていることは確かだ(ちなみに、2005年5月に徳島大学教職員組合が実施した法人移行後の教職員に対する実態調査によると、教育環境や労働条件が悪くなったという回答が56%で、良くなったのは0%だった。悪くなった理由のトップ2は、就業時間の延長と教育研究費の削減だった。おそらく、全国の大学に共通した傾向であろう)。法人化後(2004年4月)、国立大学は毎年1%ずつ大学に対する運営費交付金が削減されている(予算削減をしないことが法人化の大前提だった。法人法の付帯決議にも“法人化前の公費投入額を十分確保する”とあった)。ちなみに多くの先進国の高等教育予算は国内総生産GDPの1%だが、

日本では0.5%。あまりの酷さに徳島大学でも学長名で交付金の堅持を求める緊急声明が出された。徳島新聞にも国の成果主義導入(効率優先の改革)の再考を求める社説が載った(2007.2.22.)。全く大学の自主性と自立性を高めるという美名でだまし討ちにあったといっても過言ではない。まさに“国立大学は貧困化と多忙化に追い回されている”というのは至言だ(文科省は2002年秋のまだ法人化法案ができていない時点で、がむしゃらに2004年度法人化を目指して、各大学に中期目標、中期計画案の作成を督促した。そうした中、11月の初めに全学の目標、計画案の取りまとめ役だった山形大学の前理科学部長が土日返上の連日の激務による急性心不全で亡くなるという最悪の悲劇的な事件が発生した)。それゆえ、国の政策としての競争的資金(文科省の21世紀COE、卓越した研究拠点プログラムなど)を獲得できた研究成果がノーベル賞級に届くかいかに非常な関心をそそられる。というのは、最近、アメリカのベル研究所の研究者による超伝導に関するデータ改竄、論文捏造事件(2002年)、ソウル大の黄(ファン)教授によるヒト胚からのES細胞捏造事件(2006年)、東大、阪大での論文捏造または改竄事件(2006年)などなど研究資金獲得のための成果至上主義に起因すると思われる科学上の不正事件が多発しているからである(日本学術会議の調査によると過去5年間、国内で不正行為が問題になった学会は113に上るという)。話はそれるが、郵政の民営化も同じベテナの言説で国民は目をくらまされ、それによってどこの国の誰々が一番よくそえんでいるかはついでマスコミの俎上には上らないまま成立した。郵政民営化にあたりサービスは低下させないという約束だったが、民営化が本格的実施される(今年10月)前から郵便局の統廃合や縮小で、既に郵便物の遅配や欠配が生じて全国一律サービスが形骸化している地域が生じている。従来の郵便貯金に関わる手数料の銀行並みの値上がりが見込まれ、これらがサービスの低下でなく何というのだろうか。ついでながら、この雑文を執筆中の9月12日に安倍首相が、臨時国会で所信表明をして2日後、各党の代表質問が始まる直前に突然辞任するという前代未聞の珍事が起こった。前首相小泉の悪政を受け継ぐ、アメリカ一辺倒で国民に背を向けた連立政権の苛斂誅求な構造改革路線の破綻を示す象徴的な事件といえる。ついつい話がとんでもない方向に逸れてしまったが、ザイツ夫妻のことに戻ると、翌年(2004年)彼らはサバティカル制度(研究のための長期有給休暇)を使って順天堂大と山梨医大での一カ

月の共同研究を終えて、帰国直前の6月初めに徳島に3日程滞在した。徳島では医学部の青嵐会館と拙宅に各泊し、眉山、阿波踊り、鳴門にある大谷焼の窯元、ドイツ館(第一次世界大戦時のドイツ兵の捕虜を収容した板東俘虜収容所の資料などが展示されている。この収容所は当時の松江豊寿所長が捕虜をきわめて人道的に処遇したこと、捕虜達によって日本で最初にベートーベンの第九が演奏されたことで有名。捕虜の人道的な処遇を定めた国際的なジュネーブ条約(1929年)を批准しなかった日本では異例中の異例な取り扱いだった。所長や捕虜と住民たちとの交流は「バルトの楽園」として映画化され、昨年公開された)。徳島の片田舎でかつてこのような形でドイツと日本の交流があったことを知ってもらいたかったのだが、若いドイツ人の館員から説明を受けていたザイツ夫妻がどのような印象を持ったのかは分からない。日中あちこち連れ回され疲れきったザイツ夫妻だったが、生物の八木先生(徳島大名譽教授、1978~79年にチュービンゲン大学のマックス・プランク生物学研究所に留学)、歯学部卒の卒業生や在校生(当時4年生)とわが家の家族を交えて夜に市内の料亭で催した騒々しいままに終わった歓迎会も今は懐かしい。もっとも、夜の一家団欒を大切にドイツ人にとって、なおかつ疲労もひとしおだった夫妻にとってはなほだありがた迷惑だったかもしれない。実際、ドイツでは宴会を日本のように二次会、三次会とはせずやる習慣はないようだ(スマートと言うべきか)。筆者がマールブルク大学の研究所に5カ月滞在中にスタッフの誕生パーティが2度あったが、朝10時頃から始めワインやビールを飲んだりパンを食べたりして2時間くらいで終わる(朝10時のコーヒープレイクになるとテクニシャンがカンファレンスルームに三々五々集まり、いつもパンやチーズを食べているのは不思議な光景だった)。一度だけ、他の研究室のベロニカ Beronica 女史が隣のギーセン大学に移る時に送別会があり、誘われたので参加してみた。研究所の裏を流れるラン川と実習棟の間に Anatomie Garten というそう広くはないが芝の生えている三角形の場所があり、そこにはバーベキュー用のかまどが設置されている(こんなものがある日本の研究所はないのではないか)。そこに簡易テントを張って、良く見かけた掃除係りのおばさん達も参加して、老若男女2~30人位だったろうか、名物のソーセージを焼いたりして賑やかだった。雨が降ってきたりして、夜の8時には散会となった。ただ、よそ者に対して話しかけたり、世話をやくようなことは一切なく、

留学生に手取り足取り世話をやきたがる日本人にとって少しもの足りない気がしないでもない。誰と何を話したらいいのかも分からず、黙々と飲み食べるのはよそ者にはつらいことだ(ドイツ語で会話ができないせいもあるが)。とにかく、夫妻共に日本に大きな関心を持っており(ザイツの来日は3度目、夫人同伴では2度目)、それを見込まれてオミューラー教授の代わりを依頼されてシンポジウムの講演を引き受けたものと思われる。島田達生先生からザイツ夫妻がシンポジウムに出席すると聞き、福岡空港に出迎いを依頼されたこともあって旧交を温めるべく家族(細君、次女)で参加した(写真1)。この機会を提供していただいた島田達生組織委員長には深甚の謝意を表したい。

福岡空港から中津市へ

前もって知らされた関空からの予定の飛行機の到着時間より1時間遅れでザイツ夫妻を福岡空港に出迎えることができた。昼食後、地下鉄で博多駅に着き、博多から小倉まで行った。ザイツ夫妻は新幹線の“のぞみ”を除く、何にでも乗れるJR専用切符を持っていて、さすが便利なものを準備していると思った(しかし、地下鉄には使えなかった)。小倉で乗り換え日豊本線の中津行きに乗った。それが各駅停車の普通列車で途中特急に追いつかれたりしたので、ほぼ中間の駅で下車し、特急に乗り換えた。博多のホテルで聞いたとおりの手順で列車に乗ったのだが、なぜ博多から中津行きの特急に乗るように言ってくれなかったのか今もって不思議でならない。もちろん、無駄な時間と労力を費やすはめになった責めは良く調べもしなかった自分自身にあるのだが、大きな旅行鞆を持っているザ



写真1. 八面山金色温泉こがね山荘(大分県中津市)でのザイツ夫妻との一こま

イツ夫妻にとって余分な駅の階段の上り下りは大変だったはずで、思い出すと冷や汗が出る。中津市はJR特急で小倉から所要時間約30分(博多からだとは75分)で、福岡県境を周坊灘に向かって流れる山国川(上、中流域は景勝耶馬溪で有名)に沿って位置している。大分県では大分市、別府市に次ぐ大きさの城下町である(人口7~8万のマールブルク市と似ている)。中津藩の下士の家に生まれた福沢諭吉(1835~1901年)が、父との死別により1歳の時に大阪から戻ってから、蘭学を志し長崎と大阪(適塾)に遊学する19歳まで過ごした地として知られている²⁾。その他、オランダ語訳の「ターヘル・アナトミア」(原著 Anatomische Tabellen, ダンチッヒ(現在、ポーランド名のグダニスク)の解剖学者J. A. クルムス(1689~1745年)著)を「解体新書」として和訳した中心的人物の一人で、“…天然の奇士にしてありしなり。”、また“世に良沢という人なくばこの道開くべからず”³⁾と謳われた中津藩医の前野良沢(1723~1803年)や明治期の実業界を担った人物など多数輩出している。シンポジウム前日の7月27日の夜に中津市の八面山金色温泉こがね山荘(宿泊所、中津駅から車で約30分)で晚餐会があり、そこで初めて須磨幸蔵先生(東京女子医科大学名誉教授)、島田宗洋先生(救世軍清瀬病院副院長)と夫人、川島真人先生(中津市川島整形外科病院院長)、進藤ご夫妻(夫人がドイツ語でザイツ夫妻と話していたのがわが家の話題になった)などの諸先生と面識を得ることができた。また、研究論文の掲載やミクロスコピア誌への投稿などでお世話になっている藤田恒夫先生(新潟大学名誉教授)の警咳に接したのも予期せぬことだった。翌日(28日)の午前中は猛暑の中、村上医家資料館(村上水軍を始祖とする7代玄水の人体解剖の資料などがある)、大江医家資料館(初代、玄仙の“医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す”という意味深長な言葉を初めて知った)、福沢諭吉旧居、自性寺(じしゅうじ)の田原家の墓所、田原淳の顕彰碑、山国川が周坊灘に注ぐ河口に黒田孝高(如水)が天正16年(1588年)に築城した中津城(別名扇城という水城)などを見学した。この間、川島先生の英語と日本語の説明があり、英語の説明もさることながら郷土医史の該博な知識に圧倒された。見学にはマイクロバスを降りて炎天下を歩く場合があり、途中気くばりで冷たいお茶が配られて生き返った心地がした。参加者全員で料亭(若竹亭)での昼食の後、中津市立小幡記念図書館に移動してシンポジウムが始まった。なお蛇足ながら、金色温泉にはたくさんの露天風呂があり、旅の

疲れを癒すのには最高だった。

シンポジウムで分ったことなど

次に、シンポジウムのいくつかの口演者の内容について紹介する(図1のポスター参照)。その一人、ミシェル・ヴォルフガング(九州大学言語文化研究所教授)は流暢な日本語で次のようなことを話した。田原淳の師アショフに宛てた手紙の内容から二人の人間関係に疑問を抱いたという内容で、その手紙の日本の訳者(島田宗洋氏⁹⁾)は田原のアショフに対する気持ちを大変優しく、好意的に表現しているが、実際の田原の手紙の文面はアショフの研究指導に対する不満からいささか脅迫的ともいえる激越なドイツ語で書かれていると指摘した。普通のドイツ人の師弟間では想像できないような田原の鬱屈した内容の手紙であつたらしい(その手紙を契機にアショフは親身な指導を心がけるわけだが…)。筆者の思惑では、ヴォルフガング氏が指摘した内面的な人間関係を除いた純粋な研究上だけのつながりをとりあげてみると、アショフと田原の関係は生物の遺伝法則の発見の重要性に気づき、その研究をブルノ(チェコ)修道院の修道士だったメンデルに命じた修道院長フランツ・ナップと若きメンデルの関係と類似している⁷⁾。須磨先生は、1978年にメキシコ国立心臓研究所にある画家ディエゴ・リベラ(1886~1957年)によるフレスコ画「心臓病に貢献した世界の医学者の群像」を見て、田原が後ろ向きに描かれているのを残念に思っていたところ、自身ペースメーカー患者の吉野順夫画伯がそのことに感銘して、須磨氏が提供した資料(田原とアショフなどが写っている写真)を基に「田原淳とL. Aschoff プラス須磨幸蔵」(1989年作)という全員が正面を向いている絵を描いたこと(現在、マールブルク大学の旧病理学研究所の壁に飾られている)など、それにまつわるエピソードを紹介された。リベラがそのような絵を描いていたことを知らなかったが、メキシコ市のD. リベラ壁画美術館で見たメキシコ革命に関わった多数の人物を描いた「アルメダ公園でのある日曜の午後の夢」(1947年作)という歴史的に壮大なフレスコ画を思い出し、一脈相通じるものを感じた。最近出版された“マンガ『ペースメーカーの父・田原淳』”(図2)の作者である若い漫画家の木村壱成氏は漫画化にあたっての苦労話を披露した。彼は、“今の若い人は田原が19歳で養子になったことが理解できないのでは”と語った。たしかに養子縁組という言葉が聞かなくなって久しい。また、心臓という堅い言葉を使わず、全人的な意味を含



図2. マンガ『ペースメーカーの父・田原淳』の表紙

む“こころ”を敢て使って、田原の発見を“心臓は…、いや、心は…自らの力で動いているんだ!”と表現したというようなことを話した。このマンガの巻末には“血液循環と刺激伝導系”に関する要点が記されていると共に、アショフを始め^{こがねいよしきよ}小金井良精(1857～1944年、田原が学生時代に薫陶を受けた日本人としては初めての東大医学部解剖学教授で、専門は古人骨の研究。人柄を見込まれて森鷗外の妹、喜美子と結婚した。アイヌと縄文人との関連を初めて示唆した人類学者。アイヌ白人論が勃興していた当時としては達見と言える。晩年まで名誉教授室に通うという非凡なまでに学究の人だった。また、ほんのりとした小金井の一面が、「祖父・小金井良精の記」星新一著、河出文庫に描かれている。), プルキンエ、ヒス、など田原に関係する12人の人物の簡潔な説明があり、話が理解しやすくなっている。マールブルク大学のザイツ教授は、マールブルク大の歴史や田原のマールブルク留学中のゲストハウスがマールバッハに二カ所あると紹介した。これは初めて耳にしたことで、将来ベルリンにおける森鷗外の記念館のようなものが建てられる可能性があると思われる。二題の特別講演終了時にそれらの演者、アンジャ・ドルスツェウスキー Anja Dorszewski 博士(ドイツのボッフム大学付属バード・ユーンハウゼン心臓・糖尿病センター)とザイツ教授に中津でしか生産されていないという、いかにも日本的な番傘が組織委員長の島田達生先生からプレゼントされた。シンポジウム終了後、駅前のグランプラザ中津ホテルで新

貝正勝中津市長や三井利夫氏(日本不整脈学会元会頭)らによるユーモラスな挨拶の後、和やかに懇親会がもたれた。さらに懇親会の後で夜の街をブラブラ歩いて祇園祭の山車を見物した。このようなわけで、筆者(と家族)にとって有意義、かつ田原淳を身近に感じることでできたシンポジウムだった。翌29日の午前の田原淳博士ブロンズの除幕式(中津市役所)と午後の心臓展(教育講演、ポスター展示)は都合で欠席したので紹介を割愛する。ザイツ夫妻とは29日の朝食後にこがね山荘で別れた。彼らは30日に京都に向かい、2日にドイツに戻ると言っていた。帰国後のメールによると、京都ではニュー都ホテルに滞在して、二条城、金閣寺、平安神宮、清水寺、三十三間堂、京都御所などを観光し、日本の古都を満喫したようだ。

顕彰と普及の取り組み

次に、田原淳の業績の再評価、顕彰と普及について今までどのようなことが行われてきたか簡単に紹介したい。田原が心臓刺激伝導系の発見をドイツ語でまとめた著書『DAS REIZLEITUNGSSYSTEM DES SAUGETIERHERZENS』(Gustav Fischer Verlag, Jena, 1906)が須磨幸蔵氏らによって復刻された(1987年)。続いてその邦訳書『哺乳動物心臓の刺激伝導系：房室束とPurkinje線維の解剖学的・組織学的研究』(丸善、東京、1990年)が須磨幸蔵、島田宗洋、島田達生氏によって出版された。さらに、その英語版『The Conduction System of the Mammalian Heart』がK. Suma, M. Shimada両氏の訳出によりImperial College Press (London)から出版されている(2000年)。これらによって、世界中の人々に田原の業績が知られる基礎が据えられたと言える。その他、『世界の心臓学を拓いた田原淳の生涯』(須磨幸蔵、島田宗洋、島田達生編)がミクロスコピア出版会から世に出た(2003年)。2003年9月に田原の生誕地大分県東国東郡安岐町で「田原淳顕彰公開シンポジウム」が日本心臓ペースンギン電気生理事学会の田原委員会主催(委員長：須磨幸蔵、幹事：島田達生)で開催された。また、『ペースメーカーの父・田原淳』(須磨幸蔵、梓書院、2005)が出版された。2005年11月にNPO法人「ペースメーカーの父・田原淳の会」の広報誌として「田原通信」が島田達生先生の尽力で大分から発行されるようになった。昨年(2006年)、刺激伝導系発見100年を記念して市民公開講座「刺激伝導系発見100年 田原淳記念シンポジウム—蘭学の里・城下町中津市と医学史」が日本医史学会主催(会長：川島真人)に

より中津市で行われた。またNHKテレビで「400万人の生命を救った大発見、田原淳の生涯」が放映されている(2006年4月7日)。このように田原淳の業績の顕彰と普及は須磨、島田(宗)、島田(達)氏らを中心に並々ならぬエネルギーで精力的に行われてきたことが分かる。懇親会で島田(達)先生が大分に赴任する際に藤田恒夫先生から“田原の研究をやるように勧められた”と紹介されたように、藤田先生も自ら編集長であるミクロスコピア誌(本誌は創刊以来23年間、新潟から出版されたユニークな科学雑誌であることが評価されて、今年の5月に科学ジャーナリスト賞を受賞した)に田原に関する記事を積極的に掲載して、読者への普及に大きな役割を果たしてこられた。島田宗洋先生がいみじくも述べておられるように“学問は競争原理だけで進歩するものではない。歴史を踏まえた息の長い研究も大切だ¹²⁾”という趣意で田原淳の研究と顕彰がますます発展することを期待したい。

最後は余談で、田原淳(1873～1927年)は野口英世(1876～1928年)とほぼ同時代に生存している。しかし、残念ながら野口英世の名前は知っていても(特に近年千円紙幣でのなじみもあり)田原の名前は依然として一般的に知られていないのではと推測される。島田達生先生は、2004年のアメリカ解剖学会の分科会“Cardiac Conduction Mini-Meeting心臓刺激伝導系に関する小集会”に参加して、2日間の会合でヒスHisとプルキンエPurkinjeの名は講演者の話の中にしばしば出てきたが、田原の名は一度も聞かれなかったことに疑問を呈しておられる¹⁸⁾。野口英世はその生い立ちから研究者として認められるまでの、破廉恥な金たかりという汚名を着せられるほど数奇ながら、逆境にめげないしたたかな生涯²⁴⁾が後世の人にとって魅力になっているのではないと思われる。それに比べると、田原の生涯は淡々としているというのは言い過ぎだろうか(この原稿をほぼ書き終えてから分かったのだが、須磨先生が同様な指摘を既にされている⁵⁾)。ごまめの歯ざりりと一笑されるかもしれないが、田原の業績だけではなく、もっと日常的な姿の解明とその発掘、紹介も大切なのではないと思われる。たまたまマールブルク大学に遊学したことが機縁でシンポジウムの末席を汚しているにすぎない筆者の上述の勝手な思い込みが、田原の業績の再発見と普及に尽力されてこられた方々の不興を買わなければならないと思う。それはさておき、筆者にとっていろいろなことを学ぶことのできた実に楽しいシンポジウムだったことを付記したい。

参考

- 1)『雑种植物の研究』,メンデル,岩波文庫
- 2)『福翁自伝』,福沢諭吉,岩波文庫
- 3)『蘭学事始』,杉田玄白,岩波文庫
- 4)故 田原 淳教授—その人と業績,須磨幸蔵,医学のあゆみ,98巻4号,pp.199-204(1976)
- 5)田原先生,こちらを向いてください,須磨幸蔵,かていてる 10周年記念特集号,11,pp.24-27(1978)
- 6)刺激伝導系の発見者 田原淳先生の足跡をたずねて,島田達生,ミクロスコピア,1巻3号,pp.14-19(1984)
- 7)『メンデル散策—遺伝子論の数奇な運命』,中沢信午,新日本新書
- 8)刺激伝導系の田原原著復刻—黄色い表紙のモノグラム,須磨幸蔵,ミクロスコピア,5巻3号,pp.43-47(1988)
- 9)田原淳よりルートヴィヒ・アショフへの手紙,島田宗洋,ミクロスコピア,11巻2号,pp.2-12(1994)
- 10)よみがえる田原淳,須磨幸蔵,ミクロスコピア,11巻3号,pp.67-68(1994)
- 11)旅のメキシコ,樋浦明夫,徳島科学史雑誌,17巻,pp.44-49(1998)
- 12)心臓刺激伝導系の発見から95年,田原淳の手紙の発見とアショフ—田原国際シンポジウム,島田宗洋,ミクロスコピア,18巻2号,pp.34-36(2001)
- 13)田原淳幻視—船出から100年—,須磨幸蔵,ミクロスコピア,20巻2号,pp.4-5(2003)
- 14)田原淳顕彰公開シンポジウムを終えて,島田達生,ミクロスコピア,20巻4号,pp.80-81(2003)
- 15)『世界の心臓学を拓いた田原淳の生涯』,須磨幸蔵,島田宗洋,島田達生編,ミクロスコピア出版会,考古堂書店(2003)
- 16)田原淳—心臓の刺激伝導系の発見,須磨幸蔵,医学のあゆみ,207,pp.111-115(2003)
- 17)マールブルク遊学記,樋浦明夫,ミクロスコピア,20巻4号,pp.82-83(2003)
- 18)アメリカ解剖学会に参加して,島田達生,酒井清雅,解剖学雑誌,80巻1号,pp.3-4(2005)
- 19)『ペースメーカーの父・田原』,須磨幸蔵,梓書院(2005)
- 20)NPO法人ペースメーカーの父・田原淳の会,田原通信 創刊号(2005)
- 21)NPO法人ペースメーカーの父・田原淳の会,田原通信2号(2006)

- 22) マンガ『『ペースメーカーの父・田原淳』(須磨幸蔵原著), 木村壺成, 梓書院(2007)
- 22) 『鷗外の思い出』, 小金井喜美子, 岩波文庫
- 23) 『遠き落日』, 渡辺淳一, 角川文庫